

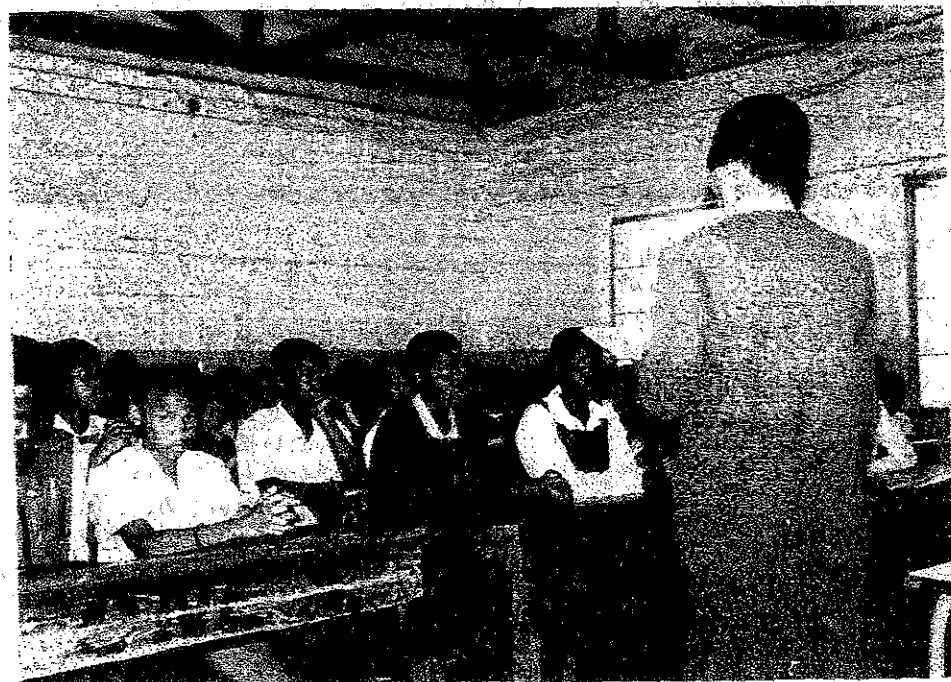
## 自由の声

No. 9 発行 アジア・アフリカと共に歩む会  
 Published by  
 Together with Africa and Asia Association

★「アジア・アフリカと共に歩む会」(TAAA)はこの3年半、南アフリカの極端に本の足りない学校や識字の学級などに日本で集めた英語の本を7万冊以上送ってきました。本の利用率を高めるために今年は廃車となった2台の移動図書館車を再整備して送りました。利用状況視察と今後の取組みの検討のために南アを訪問しました。参加者は野田千香子、浅見克則、佐保美恵子です。9月9日から18日までベノニとダーバンを根拠に見て回り、NGOと協議してきました。今回は野田と浅見が報告を書きましたが、次回の会報で、佐保美恵子が「南アのNGOの当面している苦しい状況」について報告します。

## 目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 南アの12の学校を訪ねて .....  | 2  |
| 移動図書館車2台を追って .....  | 6  |
| ソエト印象記 .....        | 7  |
| 協力者顔合わせ会の報告 .....   | 8  |
| 被災外国人学校支援中間報告 ..... | 8  |
| ルイボステイ販売のお知らせ ..... | 8  |
| 朝日小学生新聞より転載記事 ..... | 9  |
| 会を支えるのは寄付金 .....    | 10 |



送った1冊の本を教師がもって授業をする。ダーバン郊外

# 南アの12の学校を訪ねて

野田 千香子

## ■美しい南アフリカの早春

9月の南アフリカは、冬が終わり春を迎えたところだ。数か月、雨が降っていないというジョハネスバーグ郊外の黒人居住地域エトワトワの家々の周りは、半袖シャツでちょうどよい位の春になっても低い枯草で覆われている。

そんな枯草の中の牧歌的な1軒の家に到着した。白っぽい壁、小さなドア、レンガ色の屋根。中に入ってみると、目が慣れるまでかなり暗く感じる。大きな集会所のような部屋に黒人の中学生が大勢授業を受けていた。よくみると、その部屋の5、6ヵ所に先生らしい人がいて黒板のようなものを前にしてそれぞれ授業をしている。生徒の椅子や机もそれぞれ先生の方向を向いている。外はまぶしいくらいの天気だが、大きな教室は暗い。蛍光灯が少しあるが、付いていないものもあるし、全部ついたとしても多分暗いだろう。窓をみると、ガラスがほとんどないか、あっても割れて今にも落ちそうだ。壊れた窓を塞ぐために選挙時に使われたボードが置かれている。

校長や教師たちが「このあたりも暴動があった頃は大変だった。ガラスもその時割れてそのままだ」といった。遠くから黒板に見えたもののいくつかはただの壁にチョークで書いていたものであった。Methodist Education Initiative(MEI)の白人のデイヴたちが、彼らが薄茶色の壁にチョークで書いているのが見にくいを知って、せめてもと壁を黒板色に塗り替えてあげたものなのであった。

校長は授業の終わりにあちこちを向いている生徒たちを一つの方向に呼び集め、私たちを紹介した。私たちからの本を受け取り配布してきたデイヴが、私たちの持参した地球儀を使って南アと日本の位置関係を説明し、簡単に私たちとデイヴがこれまでやってきたことを話す。飛行約20時間というところで皆がざわつく。

## ■「先生の給料を払ってあげて」

私たちは彼らに学校に関しての要望を出してほしいと頼んだ。中学生といっても28才の生徒もいる。入学が遅れたり、途中休んだりした人もいるからだ。生徒たちは臆せず次々に発言した。

「先生の給料を払ってあげてください。」自分たちの境遇の悪さを訴えるより、まず先生の給料を心配する生徒の発言に思わず目がうるんだ。生徒数は900人、教師はたった12人。授業料を払っているのが120人しかいない。無給状態がつづいている。教師たちは大家族制の中で誰かの稼ぎで暮らしている。「ほしいものは建物です」「机椅子がほしい」「教科書がほしい」。ここでは教科書は5人に1冊。実験道具もないし、大きな地図もないし運動用具もない。図書室もない。デイヴや私たちはこのエトワトワ地区にももっともっと本を送っていかなければならないと心を新にした。

## ■黒人学校間の大きな落差

黒人居住地域の学校差は日本のように公立私立程度の差ではない。程度の良い黒人の学校も白人の学校と比べれば、雲泥の差があるが、黒人の学校間の落差はさらに大きい。アパルト体制の下では黒人には義務教育がなかったため学校はあるにはあったが、統一のとれた教育の制度がなく、学校経営の基盤は地域によって、また学校が設立された時期などによってまちまちであった。現在でも旧教育体制と新教育制度が混在し、教育制度は混乱をきわめているようだ。いや混乱というより手をつけられていない部分が多に多い。といったほうがよいかも知れない。

通える範囲に学校がないため、上記の学校のように住民の力で作った無認可学校は財政的に非常に苦しい。そんな学校が都市部の周りに広がりつつある新たな黒人居住地域にたくさんできている。地方から出てきた家族たちは失業家庭も多い。



3人で1冊を使う。

こんな中で全体としての中学生の勉学に対する意欲には熱いものを感じた。彼らの年齢を考えると、この数年を無駄にはできないと思った。

#### ■建物がない学校

専用の建物があればまだ良い方かもしれない。次に訪ねたのはトタン板で作られた小さな教会を借りたクリストラミニ小学校だった。普通の日本の教室より少し広いかと思われる1部屋にぎっしりの子供たちが前記の中学校のように学年別にあちこちを向いたり、こちを向いたりして勉強している。授業料は1年で約1700円。730人中払っているのは40%。教師たちの給料は交通費を除いてほとんど支払われていない。教師たちは今後学校が公認されて自治体から給料が支払われるのを待ちながら今は奉仕している。教会の裏に少し畑を作り、学校経営の足しにしているといっていた。

#### ■困難な中で15分読書

図書室も全くない学校が続いた後、私たちがたずねたスプリングスという黒人居住区のマシミニ小学校では、うれしい光景に出会った。その学校には小さな本置場(図書室と呼べるようなものではない)の小部屋があって小さな2段の本箱が2つある。私たちが送った本も入っているようだ。子供たちが10数人入ってきてそれぞれ本を1冊ずつ手にとって車座になって床にすわった。先生が「これは15分読書の時間です。順番に来て好きな本を15分読みます」と説明。生徒たちは静かに本を手にとって見ている。とてもいい方法

のように思われたし、本が大切によく利用されているのがうれしかった。この学校の生徒数は934人。教師は25人。困難な中にも工夫と努力が見られるのがうれしかったが、こうした多少の工夫ができるのも校舎や生徒数と教師の人数比がまあまあ恵まれているからできることなのだ。

読んでいる生徒にそっと聞いてみる。「あなたの家には何冊本があるの。」近くにいた2、3人の子供が指を1本出した。隣の子供は2本出した。

#### ■不毛の地に点在する家々

ピーターマリツバーグを朝早くでてダーバンへ急ぎ車を走らせる。ダーバンのホテルに、ELETの代表マーヴィンと職員のシャロンが来ている。屋までに168キロ離れたトランスカイの学校に着かなければ、と1年ぶりの挨拶もそこそこにすぐ出発する。

美しい海岸、インド洋に面するこの地方は内陸部と比べると緑豊かな豊穡の土地に見える。しばらくすると道は海岸線を離れ、それにつれて土地は乾燥し、枯草の原や丘に変わる。緩やかにうねる丘陵地帯が地平線まで続き小さな丸屋根の小屋が点在する風景は、日本人の目から見ると誠にどのかで自然そのものの美しさに思われる。

しかし視線を下に向けて土地をよく見ると石がごろごろして土は乾き、耕せるような土地ではないことがわかる。遠く点在する小さな可愛らしい小屋の周りにも畑らしいものも牧場らしいものもなく、また小川などもないようだ。同乗するELETの人たちに聞いて



1冊の本を使ってすばらしい授業をするウインストン先生

みる。「この人たちはどうやって暮らしているのですか」「ほとんどがダーバンやモントフェレーレまで働きにいつている。家からタクシー（南アの黒人のタクシーというのは乗り合い小型バスのごとである）で数100キロ通ったり出稼ぎにいつたりしている」ということであった。「水は遠くの川まで汲みにいつている」ひとつひとつの屋根の下ではどんな暮らしが営まれているのかと想像するとなまやさしいものではないことがわかる。車が入れるような道路から遥か離れた不毛の土地に家が点在するのは生活を成り立たせる見地からは無意味なことであり、アパルトヘイト政策によるものとはしか考えられない。

■丘の上の学校に送った本があった

不毛の地の枯草と石ころの丘の道を車が上がって行くと道端にひとりの少年が待つていて車を止め、ここでちょっと待つていてくれという。しばらくして、少年の報せで鼓笛隊が丘の上からやってきた。こんな歓迎は生まれて初めてだ。鼓笛隊の間を車はずしずと校内に入つていつた。

このボンバジ小・中学校の500人の生徒や教師たちは今か今かと朝から私たちを待つていてくれたにちがいない。この後、今日の式次第というプログラムをもらったので、見ると私たちの歓迎会の内容であった。

図書室を見せてもらった。小さな部屋の本棚に大分前に送り出した覚えのある本が並んでいた。先生たちは本について心から感謝していた。大事に授業に使つていつるといつていた。

■小説をドラマ化して生徒が演じる

歓迎会の中で少ない本を授業で上手に使う1つの方法を見せてもらった。ある教師が私たちの送つたハイネマン出版の小説を脚本化して、生徒に演じさせていつている。一人の少年が都市に出てボクサーとして成功するといふ話のドラマである。このような田舎では自分たちと違ふ生活や考え方や感じ方があるといふことを知る機会も少ない。広い世界を知るといふ意味からも小説は大切な教材といえよう。ドラマは大勢の生徒が参加して盛り上つて終わった。

こうした本の運用の仕方を指導していつたのは、ELETである。この後ELETの活動については項目を改めてふれたいと思つたが、ELETの授業法の指導と私たちからの本とがうまく噛み合つて役に立つていつていることを知つたのは、二重の喜びであった。

■本を使って魅力ある授業をする先生

次の日の午前中に見学したリヨイド小学校の魅力ある授業には感激した。埃っぽい田舎の学校の生徒数は1200人。教師の人数は24人。図書室らしい部屋を見せてもらったが、古い使いものにならないような本と教科書が置いつてあるので、とても図書室とはよびがたく、教材室といふような小部屋である。しかしそこに私たちが送つた本が少し置いつてあつた。

教室に案内されてみると、厚みのある立派な体格をしたバリトン歌手のような声量の持ち主の先生が片手に私たちが送つた本を1冊持ち、授業を始めようとしていつているところだ。黒板に先生が描いたらしい2枚の絵が貼つて



授業中、ふと振り返る低学年生

ある。先生がその絵を使って質問をすると生徒は元気よく手を上げて答える。「この家とこの家は違うのだろうか」ハイ、ハイ、ハイ。生徒が知識や想像力を駆使して答えたところで、すばらしいバリトンの先生が本を朗読し始める。生徒は全身を耳にして聞く。生徒の机の上には本もノートもない。

もう1つの教室の授業も女性の教師が上手に質問をしながら本を読んでいくのだが生徒たちは珍しい東洋人の見学者がいても集中して聞いている。もちろん先生の使用しているのは、私たちの送った本である。

#### ■ ELETの活動について

English Language Education Trust (ELET) は創立10年のNGO。外国や企業からの援助で運営されてきた。事務局はダーバンの中心にあり、オフィスでは10数人が働いている。この10年間の活動の内容は、学校の教員の指導と教材の製作と支給等。

そのほかにELETは20人のフィールドワーカーを持ち、1人のフィールドワーカーは2年の単位である地域を担当して、その地域の20の学校の教育指導を行なう。1つの学校の中で特に2人の教師を選びELETの指導法を教える。2年間経つとフィールドワーカーは他の地域に移動するが、指導を受けた2名の教師は他の教師にELETの指導法を伝授することができる。

ELETの活動範囲は南北300キロに渡る。一般に南アの教育法は教師が一方的に生徒に教え込み、生徒は受け身で聞いたり、書き取ったりするだけの古い指導法であるようだ。ELETのやり方は、生徒を授業の中に自然に巻き込んでいくやり方だ。去年ダーバンの近くのインド系の学校でELET指導の授業を見学した。これもすばらしかった。新聞社に当日の生徒数分の新聞の寄贈を依頼しておき、生徒に配る。先生は生徒に自分や家族に関係があると思った記事や広告を切り抜いて紙に貼っていきなさい、そしてあとでどんな関係があるのかを説明しなさい、という。先生はそれ以上指示したりお説教を加えない。つまらない記事を切り抜いた生徒の説明をだまって聞く。押しつけがないので子供が自然に新聞に興味をもつきっかけになりそうだと感心したのであった。

同行したフリーライターの佐保さんの紹介でELETに本を送り始めて2年半になる。ELETはその広い活動範囲に会からの本を配布してくれている。そしてそれが今回かれらの教育指導と相俟ってどんなに役立っているかを知ることができた。

#### ■ 南アNGOの当面する財政問題

南アフリカの現地のNGOが財政的に苦しくなっている、NGOによっては破滅状態におかれている、という話は南アを訪れる前に帰国した人から聞いていたが、このELETでもアメリカや北欧諸国の政府からの助成金が直接ELETの運営資金として来ていたのが、今年からなくなってしまったのだ。アパルトヘイトが終了し新政府になった時から外国政府からの援助金は南ア政府へいくことになり、それがうまくNGOへ下りてこないのだ。企業などからの資金だけに頼り、ELETでも職員の給料を大幅に減給したという。この点に関しては、佐保美恵子さんが取材してきているので、次回の会報に報告する予定である。

私たちの送った移動図書館車は南アフリカに到着していて稼働の準備段階にあるが、これが本格的に稼働し始めたら少ない本がもっと広く活用されることだろう。次回の南ア訪問が楽しみである。

# 移動図書館車2台を追って

浅見 克則

前号で報告した移動図書館車(2台)を追って南アフリカに旅した。以下は本プロジェクトの進捗状況の報告である。

## (1) 経過

商船三井の「バイオレット」号(特設遊覧船)に積み込まれ、一路、南ア第3の都会ダーバンに向けて旅立った2台の車を横浜の港で見送ったのは、桜吹雪の舞う4月半ばであった。1ヵ月の航海の後、ダーバンの港に陸揚げされ、直ちに通関のため、保税倉庫に収容されたが、ちょっとした行き違いや事務手続きに手間取り(国内産業保護の為に周辺諸国と輸入規制条約を結んでおり、今回はこの規制を免除してもらう申請を出してあった。)数か月にわたって保税倉庫に留置になってしまった。

季節は春から夏へ、その猛暑の夏も峠を越えようかという頃、現地のカウンターパートナーのMEI(ベノニ)とELIET(ダーバン)から相次いで車受領の喜びの一報が届きやっと一歩前進。この時点で現地のパートナーたちと今後の移動図書館車運用についての打ち合せと現地学校の視察とを兼ねて現地に向かうことになった。

## (2) MEI (Methodist Education Initiative, メソヂスト教育イニシアチブ)へ送った

松伏町寄贈「まつの木」号(積 2500冊 積型)について

ベントレー氏宅の前庭にパーキングしている「まつの木」号に再会したのは感動であった。2万数千kmを隔てて埼玉県とこの乾いた大地に働く場を得た「まつの木」号は、その数奇な運命を知ってか知らずか端然とその巨体を休めていた。既に積載予定の図書も(我々が送った本)氏のガレージにスタンバイ。現在、大きな「まつの木」号と図書が収容できる鍵のかかるガレージを物色中とか。氏の話では今年末にかけて2~3ヵ月の試験運行の後、本格運行に入りたいとのことであった。

## (3) ELIET (English Language Educational Trust, 英米-リン オグレン)

林田製作所寄贈 (積 600冊 積型)について

国内での相当の整備にも拘らず、長期の船旅と保税倉庫に置けるおける放置によりかなりの部分が痛み、再修理中。日本より部品が届き次第、これも11月頃より運用に入る予定。

## (4) 考察

圧倒的に資金が足りない。現地パートナー達の悪戦苦闘振りが今回良く判った。例えば「まつの木」号クラスの車は現地では大型免許が必要(日本では普免)である。従ってドライバー経費も高い。又カバーするエリアが広大な為に走行距離が伸びる。これは約10年の勤めを日本で終えた老体にはこたえるに違いない。整備費も相当用意する必要がある。又、日本では考えにくいがかージャックに遭う可能性が高いのでガードマンを同乗させなければならない。同じ理由で鍵のかかるガレージが必要。...etc.我々(TAAA)にも資金の限りがあり、どの程度までの援助が可能かは判らないがハードの援助(本、車等)のみならず、ソフトの援助(運用資金、運用のノウハウ)も考えていく必要があるだろう。



読書を終えてバスに乗り込む



# ソエト印象記

浅見 克則

佐保さんの友人ヘニングスさんの紹介でソエト内の教会へ。ソエトとは元々白人が安価な労働力を黒人に得たいが為にジョハネスバーグ近郊に作った黒人専用地区。朝晩バスポートを携帯した黒人達がジョハネスバーグ周辺の近郊に働きに出る。黒人達は外国人として扱われ、南ア人としては扱われないそんな異様な状態も人種隔離政策の撤廃と共に今は単に語りぐさになった。

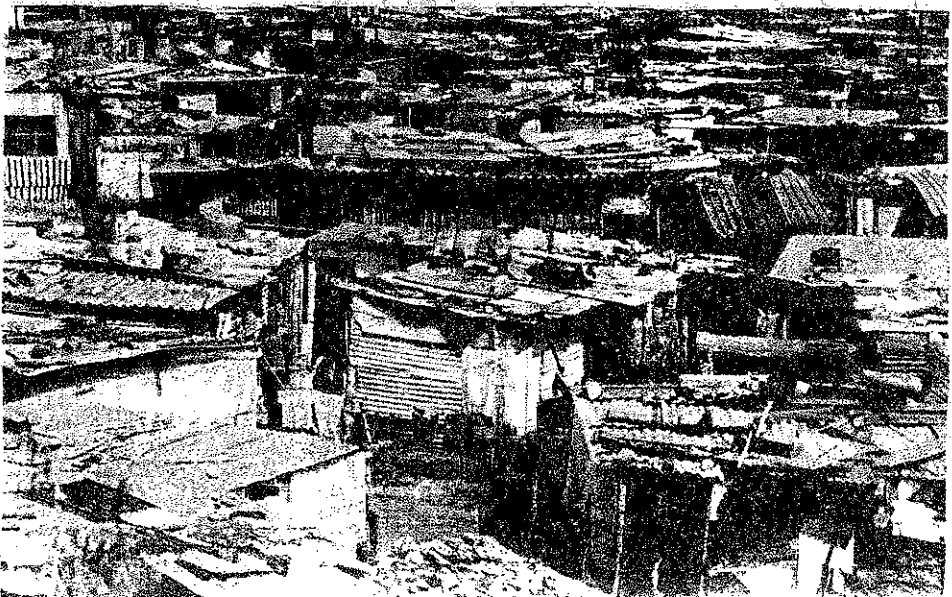
約束の時間に少し遅れて体育館のようなチャペル内に入っていくと、数10人の男女が半円形に集まっている中心に、ジーンズ姿の2人の男性が掛け合い漫才の如く矢継ぎ早に説教をしている。黒人の中に白人も混ざる参会者の中に期せずして黄色人種（我々）も混入し完全に理解はできないものの充分にその感動は伝わって来る。そのジーンズ姿の若い黒人がトレバー牧師であった。

散会后、彼の案内でソエト内を巡った。ざっと浦和・大宮位の面積に4百万人の人口。バサついた土地にマッチボックスと呼ばれる家が延々と丘の向こうまで続く。教会に参会していた黒人少年の住むスクウオッターキャンプをたずねる。失業率50%以上の黒人社会を如実に示す人の群れ。道端にたむろする失業者はいつ強盗へと化すか判らないのだ。彼の家はトタン板をボックス状に張り合わせた3畳程の空間。昨年レイプされて殺された母親が写真の中でニコヤカに笑う。今日はその1周忌だそうだ。潤んだ彼の弟の目を直視できなかつた。

トレバー牧師はかつて黒人の指導者と呼ばれていた人々がソエトを捨てジョハネスバーグの白人の豪邸に移ってしまったという。黒人社会の中に階層が生じてきたのだ。現在はマンデラ大統領の強烈な個性が選挙後の南ア社会の不満や不安を押さえ込んでいるがマンデラ氏退陣後の混乱は想像もできない。

トレバー牧師は続ける。現在の南アに最も必要なのは、最下層の人々と子供達にしっかりした教育を施すことだ…。この言葉は期せずして我々(TAAA)の活動の方向が間違っていなかったことを裏付ける力強い言葉であった。

ソエト



報告 南アの図書活動援助への協力者顔合わせ会 程塚明子

アジア・アフリカと共に歩む会に、何らかの形で協力している方が一堂に会する催しが10月7日に、北浦和の労働会館で行われました。

移動図書館車プロジェクトを支援してくださっている方、大量の本を寄贈なさってくださったアメリカンスクールの方、南アフリカから、留学生として来日なさっている方、与野郵便局の方、本を送る作業をしている会員等が出席してくださいました。

大学で、福祉関係の教授をなさっている方は「私どもの学生の何人かが、阪神大震災のボランティアに行きました。彼らの体験談を聞いて、ボランティアというのは、そこに協力を必要とする人がいる、自分にもできることがあるなら、思わず足が一步前へ出てしまうような、自然発生的な行動であるということがわかりました。」と、語っていました。

また、会員のひとりには、「この団体の活動は皆さんから送っていただいた本を梱包し、南アフリカに送る、現地に行つて、本が役立っている様子を見てくるという、具体的で、わかりやすいボランティアだと思います。」と、言っていました。

普段は顔を合わせる事が出来ない方々の、サンドイッチをつまみながらの、肩のこらない交流となりました。会は、自己紹介、移動図書館車プロジェクトの経過報告、質疑応答と続き、終了時間を30分押しでのお開きでした。

この会で、おぼろげながらも、私達の活動の全体像が、そして、一人一人の僅かな力を持ち寄つて、支えている小さな市民団体だということが、おわかりいただけたのではないのでしょうか。

阪神被災外国人学校援助の途中報告

被災した神戸東朝鮮初中級学校と神戸中華同文学校には会から3月と8月に計3回訪問し、また朝鮮学校の白校長は会まで足を運んで下さいました。会(TAAA)に集まった寄付金の合計は10月11日現在で119万4677円です。これまでは上記の学校に被害に応じて4対1で送ってきましたが、中華同文学校は8月の時点で修理のめどがついたということですので、今後は朝鮮学校に送ります。朝鮮学校は校舎が再建されつつありますが、保護者や地元の後援者が被災者でもあるため、通常の運営費についても苦勞があります。

しかし震災をきっかけにいくつかの外国人学校が連絡しあつて政府や自治体と各種学校扱い見直しや助成金の支給についての話し合いを持つ場も生まれています。

1996年3月までお附：郵便振替「学校災害義援金」00100・0・46745

南アフリカ直輸入

ルイボス・ティー販売のお知らせ

ティーバック1袋でティーカップ約3杯分。

「ルイボス・ティー」1箱80バック入り

1箱2,000円(送料・税込み)



- ・ご注文は5箱以上でお願い致します。
- ・氏名、住所、電話番号を書いて、Faxまたはハガキで会までお申し込み下さい。
- ・ご注文後、お茶と一緒に振替用紙をお送りしますので、会宛に振込んで下さい。

無農薬、ノンカフェイン、アトピーにも優れた効果。赤ちゃんから高齢者まで紅茶やコーヒーがわりにお楽しみください。老化促進の活性酸素を排除する作用があります。

販売者アンリ・ヘルシーのご好意により、1箱2,000円のうち600円が会への寄付となります。



95・10・4

# 朝日学生新聞

発行所 朝日学生新聞社  
 〒100 東京都千代田区千代田1-1-1  
 (414) 55-3221 (代)  
 (414) 55-3222 (代)  
 (414) 55-3223 (代)  
 (414) 55-3224 (代)  
 (414) 55-3225 (代)  
 (414) 55-3226 (代)  
 (414) 55-3227 (代)  
 (414) 55-3228 (代)  
 (414) 55-3229 (代)  
 (414) 55-3230 (代)  
 (414) 55-3231 (代)  
 (414) 55-3232 (代)  
 (414) 55-3233 (代)  
 (414) 55-3234 (代)  
 (414) 55-3235 (代)  
 (414) 55-3236 (代)  
 (414) 55-3237 (代)  
 (414) 55-3238 (代)  
 (414) 55-3239 (代)  
 (414) 55-3240 (代)

**地名さんぽ**

知床、アイヌのシ  
 リ、エトコ、大地の奥  
 き山、大所この通り、オ  
 ホ、シクシク、加、山な  
 継、継、継、は、代、代、代  
 継、継、継、は、代、代、代  
 継、継、継、は、代、代、代  
 継、継、継、は、代、代、代

# 南アの子たち

南アフリカのボランティア

## 本をおくって応援

南アフリカのボランティア  
 子が、つかわなくなった  
 書籍の本や辞書、さらになら  
 なかった図書館用のバスなどを  
 贈り、アフリカの国内の黒人が  
 学ぶ機会をひろげてい  
 ます。これまでに約七万冊の  
 本と三語のバスが渡された  
 り、今年中には新たに三語の  
 バスもおくられる予定です。  
 アルトバウト（人権擁護取  
 組）を通じて活動を行ってき  
 た黒人の子どもたちを、少し  
 でも応援したい、そんな気持ち  
 がグループの活動を支えて  
 います。（大島 正一）



野田千香子さん

一九九二年  
 にできた、  
 外部に  
 入った  
 小

### 長い間の差別で教育不十分 7万冊どバス使って



イが  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて  
 りて



アジア、アフリカと共に歩む者がおくれた移動図書館用のバス。  
 1年に2000冊ほど送られるといい、地域の子どもたちにも使ひ  
 たい、いま、10月、ヨハネスブルグ郊外の学校で、(南アフリカ  
 のレインボーションにも、アジア、アフリカと共に歩む会提供)

「アフリカ、ア  
 カ、東に  
 野田さん  
 018.8022  
 2071

# 会の活動を支えるのは皆さんの寄付金です。

3年半のここまでの活動を支えてきて下さったのは、皆さんからの財政的なご援助によるものです。ここに改めてお礼を申し上げます。今年、3年目に初めて郵政省ボランティア貯金からの助成金を受けることができました。これも皆さまの支えのおかげで続いてきた活動の成果が認めただけしたことによるものと思います。心から感謝しております。

1995年度郵政省助成金が1年間どのように支給されるかと申しますと、次のようです。

- |   |                                |            |
|---|--------------------------------|------------|
| 1 | 南アでの移動図書館車稼働についての資金の一部として…………… | 2,921,000円 |
|   | (給油代、車維持費は全額支給、スタッフ給料は100万円不足) |            |
| 2 | 本の輸送費の一部として……………               | 675,000円   |
|   | (必要な額の半額以下です)                  |            |
| 3 | 南ア視察費2回として(ほぼ全額)……………          | 1,000,000円 |

逆に、寄付金や物品販売収益金(レイトイ、講等)で賄わなければならない部分は何かと申しますと通信費、事務費、交通費、本輸送費の半分、車輸送費と整備費の6月以前支払いの分、南ア図書館車スタッフ費用の3分の2などです。

ところで、1995年度上半期を集計してみました時、4月～9月の半年で

- |                          |            |
|--------------------------|------------|
| ◇郵政省助成金で賄えない部分の支出合計…………… | 1,167,031円 |
| ◇寄付金と収益金による収入合計……………     | 594,241円   |

すなわち、57万円余のマイナスとなっています。これは前年度の繰越金から支払っています。

こうした理由から、助成金をいただいても自己資金(寄付金等)がどうしても必要になってくるわけです。さらに、下半期には、本の輸送費用と南アのスタッフ費用がボランティア貯金の助成金の範囲では必要な半額に満たないため、われわれの力でがんばらなければならないわけです。

南アフリカ現地のNGOの人たちも本当によくがんばって努力しています。やれることは自分たちの努力でやろうとしています。成長過程にある南アの子供たちが、生活は貧しくとも、教育だけは十分に受けられる日が早くくるよう願っています。そのために本輸送と移動図書館活動が財政的な理由で遅れることのないよう、ぜひ応援いただきたくお願い申し上げます。

(会計 吉田妍子)

◆TAAAでは平均月に1回(土助線)本の分類や梱包作業をしています。場所は埼玉線南与野駅から6分(池袋から30分)のところ。また、ときどきインターナショナルスクール等へ車で本を引き取りに行く仕事もあります。労働力でご協力いただける方、ぜひご連絡下さい。高校生から60代の方までが参加されています。

◆ ニュースレターの送付を特に必要とされない方は中止いたしますので、ご面倒ですが、電話、Fax、ハガキなどでご一報下さるようお願いいたします。

南アフリカ 自由の声 第9号

1995年10月25日発行

新所 アジア・アフリカと共に歩む会

〒338 埼玉県与野市大戸5-17-1 野田方 Tel 048-832-8271

Fax 048-832-3607 郵便番号:「アジア・アフリカと歩む会」00100-4-608515